



Subaru

男声合唱団

ニュース №569

'16. 8. 5

戦争を語り継ぐ特別企画

バイカル湖とモンゴル合唱交流の旅

2016年7月14日～7月21日 (その1)

□昨年夏私たちは「第2次世界大戦終結70周年特別企画」として「極東シベリアから旧満州合唱交流の旅」を行い、ロシア与中国東北部(旧満州)で亡くなった戦争犠牲者の方々の墓前で鎮魂の合唱を歌い、そして中国とロシアの合唱団との合唱交流を成功させ「不再戦と平和友好」を誓いました。

今回は一昨年のヴォルガクルーズ、昨年のロシア・中国合唱交流に引き続き、第3弾として、ロシア民謡のふるさとの一つ「バイカル湖」訪問と、ロシア民謡合唱団との合唱交流、そして第2次大戦での日本敗戦後捕虜として抑留されシベリア地方で命を落とされた日本人の方々の鎮魂の墓参、そして「ナーダムの国・未知の夢の国・草原の大地モンゴル」を訪問してきました。

(株)ユーラストラベラーズが企画した今回の旅は、日本ユーラシア協会・日本うたごえ全国協議会・ロシア民謡合唱団コスマス等の後援協力のもと行われました。北海道札幌市から東京・千葉・神奈川・大阪・奈良・九州(福岡・熊本)・広島等全国各地で、合唱活動や民主医療・ユーラシア協会関係で活動しておられる方、また藤後団長はじめ参加される方々からお誘いを受けての旧来のご友人等多彩な顔ぶれの方々39名が参加されました。



藤後さんには今回も訪問団の代表・団長を引き受けさせていただきました。また参加者に向けて今回の旅の詳細な資料を作成していただきました。指揮者の本並先生、ピアニストの山下和子さん、コンサートミストレス相根さかゑさんには、今回の合唱交流の成功に大変お世話をかけました。昨年

同様飛行機の乗り継ぎやモンゴルとロシアでの入国・出国手続きに大変な時間とストレスのかかる厳しい旅でしたが、ロシアとモンゴルでの合唱団と平和友好の合唱交流ができ、モンゴルの大草原と美しい町・イルクーツクそして「ロシア民謡のふるさとバイカル湖」を訪れる幸せな経験をすることができました。皆さん無事帰国できて何よりです。なお「昴」よりの参加者は伊藤さん、相根さん(ご夫妻)、清水さん、土井さん(ご夫妻)、丹羽さん、西鳩さん(ご夫妻)、吉川(夫婦)でした。

スケジュールと訪問都市・主な出来事

1日目：7月14日(木)モンゴル・ウランバートルへ・飛行機乗り継ぎの長旅の1日目

関空発12:25発 仁川空港14:15着 全国各地から仁川空港へ終結。ウランバートル行きの飛行機への乗り継ぎ待ち5時間。仁川空港19:55発・20:30頃遅い機内食の夕食。ウランバートルに23:30着。バスとワゴン車を乗り継いで深夜1時にホテルモンゴリカに宿泊しました。

(不思議な出来事)：空港から専用バスにてホテルに向かう途中の橋に来た途端、ガイドが「車を乗り換えます」と言う。真っ暗な深夜の中、疲れた体を動かして小さなワゴン車に分譲して橋を渡る。なんなんと！渡っている橋は今にも朽ち果てそうな？木造の橋ではないか！納得？！（翌朝歩いて渡る。）



木造の橋を渡る車



バスが通れない木造橋を歩いて渡る。

2日目：7月15日(金)「ダンバルジヤー日本人墓地慰靈碑」を墓参。現地少年少女合唱団と合同で慰靈の合唱交流。ウランバートル観光後「テレルジツーリストキャンプ」(ゲルの宿舎)へ



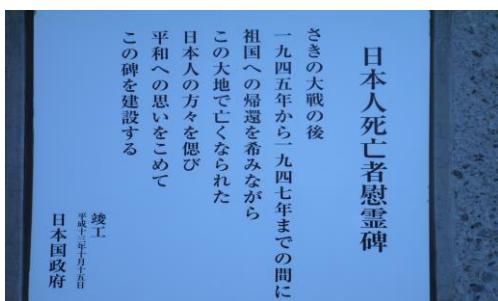
墓地慰靈碑前で献歌



日本人死亡者慰靈碑
さきの大戦の後
一九四五年から一九四七年までの間に
祖国への帰還を希望ながら
この大地で亡くなられた
日本人の方々を偲び
平和への思いをこめて
この碑を建設する



階段上にある「ダンバルジヤー慰靈碑」前で



2日目は8：00よりホテルで結団式を行いました。藤後団長の挨拶のあと滝澤さんの司会で旅行メンバーが紹介され、その後、今回の主要な目的の一つである、墓参での慰靈合唱、モンゴルとロシアの合唱団との合唱交流のために第1回目の合唱練習-歌合わせを行いました。(約40分間)

9：00 ホテルを出発し、専用バスにてウランバートル市内を観光。添乗員通訳はナラン・ガルクさん（モンゴル国立教育大学卒業 日本留学経験あり。30代の才女。遊牧民出身です。（遊牧民の子供たちは都会の定住区の宿舎から学校へ通学し、夏休み期間の5月から7月に遊牧の実家へ戻り、休みが終わればまた学校へ帰る生活のことです。）



「カンダル寺院」(チベット系仏教寺院)見学。高さ 10mの金箔の大きな仏像の前で、大きな「マニ車」を廻し読経する中年と若者の僧侶が並んで座っている。観光者向けのなんとも不思議な雰囲気の寺院。

12：00 から墓地へ。71年前ソ連軍の捕虜となり、このモンゴルの地で命を落とした日本人の靈を慰める「ダンバダルジャー日本人慰靈碑」を墓参しました。現地合唱団・国立宮殿モンゴル少女少女合唱団と共同で合同慰靈合唱を行いました。

われわれ日本の訪問合唱団は「花」「星よお前は」「おりづる」「さくら」の4曲を靈前に献歌しました。

モンゴル少年少女合唱団は小学校1年から7年生（中学校1年生）28名。ただいま夏休み中。2000年に各小学校から募って課外活動の一つとして合唱とモンゴルの踊りをする合唱団を立ち上げたとのこと。彼らが外国人の前で合唱を披露するのは初めての経験らしい。「ジンギスのモンゴル」「仔馬・こうま」「私たちの高原」の3曲を披露してくれました。

この国の景色にふさわしい伸びやかで澄み切った歌声とまとった民族衣装で軽やかに踊る姿は観客に明るく爽やかな感動を与えました。指揮なしで声も踊りもよく揃っているのは普段の練習の成果！先生やご父兄の熱意が感じられてほほえましい。少年少女全員に日本のお土産「ノートと鉛筆・消しゴムセット」を贈りました。

(注記)モンゴルでアマチュアの合唱団で活動しているのは少ない。プロの合唱団は現在は皆無に近いとのこと。

「モンゴルの音楽」といえば、モンゴル馬頭琴とホーミの演奏であり、「モンゴル民族音楽舞踊コンサート」がウランバートルの中心にある劇場「月ハウス・ツウメンエフ」で観光シーズン中、毎日2回コンサートを行っています。

墓参終了後、専用バスでウランバートル郊外のテレルジのツーリストキャンプへ(ゲルでの宿泊ホテル)向かいました。レストランでモンゴル料理の定番ランチを昼食後、チンギスハーン像テーマパー

クに立ち寄り、チンギスハーン記念会館前で記念集合写真を撮りました。まわりにウランバートル証券取引所や郵便局、JAICA の入った大きなビルが立ち並び、その近く(チンギスハーン記念館の斜め横)に、70 年前に日本人捕虜が建てた木造のピンク色の立派な建物がオペラ劇場として今も上演され使われているとのうれしくも誇らしい紹介がありました。



日本人捕虜が建て、オペラハウスとして今も活躍中！



ジンギスハーン像テーマパークの巨像

●ガイドが語るモンゴルの働く人々の「所得」

公務員の給料は安い。私立(私企業)の会社の給料は高い。裁判官・国會議員は高い。金属労働者高い。

学校・幼稚園の先生安い。医者は無茶苦茶安い、なぜか？？忙しく休む暇ないのに安い給料で働いているとのこと。

●モンゴル料理（定番）のランチやディナー(写真を忘れました。食べてしまって！)

前菜：マヨネーズと塩でドレッシングされた薄味のサラダ（細切りのキャベツのみ？）と黒パン（バター味のしない質素なバサバサの）

メインディッシュ：ラム肉（又は豚肉）とポテト、ラム肉は蒸すのがモンゴルの肉料理の基本。今回は蒸した後に少し焼いた感じ有り、味付け（薬味）も塩味（塩コショウ？）、ドレッシング無し。全体に薄味の何とも素朴な定番料理。紅茶1杯：ティカップに各自紅茶1袋とポットの入った湯を入れて作る。（コーヒーは出ない！）

ジンギスハーン記念館前で



モンゴル草原の山並み？と放牧地区の街並み



宿泊したゲルの建物

17:30 テレルジに到着。

2人部屋のゲル（観光客用）に投宿しました。シングルベッドが2つ。小さなイスと机が一対。中央に薪ストーブ。遊牧民のゲルとは異なり、観光客用に木製の梁を縦横に組み立て、足元にビニールシートで保温している。LED蛍光灯？40wの明かり。コンセント2口、木製の椅子2脚にテーブル、中央に薪ストーブ。トイレとシャワーは共同で山小屋風（使ったティッシュは便器に入れないで横のごみ入れに）、新しくて清潔感がある。

標高1800m、夜間の気温は7月でも5°Cに下がるため、ストーブで暖を取る必要がある。

定番のモンゴル料理を大きなゲルレストランでいただく。料理はランチと変わらず。スープが加わるくらいか？ビールが別料金で、縦長のグラス(500cc) 1杯 2000トウグリ (=100円 1000トウグリ紙幣2枚)

（「ゲル」：日本では「パオ」と通常言っているが、モンゴルでは「ゲル」という。中国で「パオ」と言っているのが日本でも通用している一例である。）

3日目：7月16日（土）モンゴル高原でミニナーダムを満喫する一日！

朝6時起床。既に太陽は上り、広々と広がる草原は冷氣の中で朝露を含んで生きだしている。ゲルのベッドから起き出し、朝の所用と洗顔を共同トイレ（新しい清潔な施設）で済まし、軽く体をストレッチしながら眼前の光景にすっかり目を醒ました。

足を踏み入れているゲルの建つ草原そして後ろの斜面一面に高山植物の花・花・花！今を盛りに、赤・黄・ピンク・紫の淡く・濃い色合いにあたり一面を染めている。日本の真夏の北アルプスの高山に咲く花がここには規模を大きくして短い夏の今を楽しむかのように咲き誇っている。眼前に見

渡す 270 度のパノラマの風景は日本のどこにも見ることのできない別世界！すべてが短い草に覆われた小高い丘のような稜線が左から見ても、右から見てもどこまでも続き、その牧草地が自分の立つ手前までグリーンベルトの感で途切れることなく続いている。その草原地に東から西へ 1 本の踏み跡が道となって牛の群れが 1 頭ずつゆっくりとした足取りで移動している。じっと見ているとはっきりと右から左へ確実に歩いている。その周りを鍛えられた数頭の番犬が仲よく 1 匹づつ横について一緒に歩いている。その中には人の姿が見えない。（普通は馬に乗って、今は車で移動すること。コンクリートの道ではなく、土道を）時間はゆっくりと経過し、確実に遊牧民たちの 1 日が動き出していることが遠くから見下ろしている私たちにも自覚できる。なんとも私たち日本人観光客にとっては夢を見ているような別世界だ！



宿泊地・ゲルキャンプに向かう 1 本の土道の自動車道路



ゲルの建つ高原の丘を朝の散歩でのぼる

朝食（バイキング） 8:00～9:00

朝食後散策・フラワーウォッチング 9:00～10:30

今日は一日中テレルジのゲルキャンプで草原のモンゴルの風景と高原の中での生活を送りました。

午前中ミニナーダムの催しを楽しみ、（モンゴル相撲、弓競技、競馬、モンゴル音楽と踊りの鑑賞）

昼食後、14:00からオプションで 1 時間の行程の「高原の馬上の人」となりました。

18:30から夕が食前の 1 時間、合唱レッスンをキャンプレストラン内で行いました。

また深夜に希望者で星空見学を行いました。月明かりがあってか、満天の星空とはいきませんでしたが、北極星がはっきりと見えたとのことです。



ゲル前での朝の散歩と交歓

出張ミニナーダム 10:30～12:30

(1)「モンゴル相撲」8人。2人ずつで 1 回戦から、準決勝・決勝と屈強の筋肉質レスラーの面々。終わった後に全員に馬乳酒（アルコール度 2%）をふるまう。モンゴル相撲は土俵がないため「押

し出し」がなく、柔道の最初の探り合いから勝負時に投げで勝負を決める形となる。



モンゴル相撲の勝負！



頭に冠を被る優勝した力士



優勝した力士たちと記念写真

(2) 「弓射」のデモンストレーション

70mほどの距離の標的を弓矢で当てる競技。射手は視力がいいのか高い確率で的を当てる。一投ごとに拍手と歓声！

(3) 「競馬」 少年たちが10頭の馬に乗り競走する。
5歳から15歳歳のモンゴルの少年たち。丘の向こうに消えたかと思うと、小さな馬上の姿が見る間に近づき、1列になって先頭を競い合ってくる。5歳の少年が優勝し頭を撫でてもらってその栄誉を称えられる。全員に馬乳酒がふるまわれ、喉の渇きをいやすく飲んでいる姿が印象的。全員に日本からのお土産が渡されました。



(4) 「草原の風というコンサート」

馬頭琴演奏・モンゴル三味線の演奏・モンゴル歌謡の歌
手がモンゴル歌謡を歌うと共に4人の女性が民族衣装で踊りを披露しました。今モンゴルで流行している日本の歌謡曲「北国の春」を日本語で独唱してくれました。



馬に乗る！」



モンゴル高原の「馬上の人たち」・1時間の行程で

